

シンポジウム報告

魅惑の鉄心齋文庫―伊勢物語の〈文化史〉―

山本登朗^{とくろう}

*キーワード

物語文学・伊勢物語・鉄心齋文庫・享受史・文学と絵画

二〇一八年（平成三十年）五月三十一日に国文学研究資料館で開催された地域資料専門員会議（旧「調査員会議」）において、シンポジウム「魅惑の鉄心齋文庫―伊勢物語の〈文化史〉―」が行われた。

国文学研究資料館では、鉄心齋文庫の一千点を超える伊勢物語コレクションが寄贈されたことを受けて、二〇一六年度から三年間の予定で、基幹研究「鉄心齋文庫伊勢物語資料の基礎的研究」が続けられている。このシンポジウムは、その成果をふまえ、その中間報告も兼ねておこなれた。以下、まずはこの基幹研究で行われた六回の研究会のおもな内容を紹介しておく（各人の所属先は当時のまま）。

・第一回研究会（二〇一六年五月二三日）

《研究発表》

「鉄心齋文庫のあゆみ」藤島綾氏（国文学研究資料館）

「鉄心齋文庫の伊勢物語資料」山本登朗（関西大学）
《見学》

展示室特設コーナー「伊勢物語そろいぶみ―鉄心齋文庫コレクション―」解説・山本登朗

・第二回研究会（二〇一六年八月一九日）

《研究発表》

「鉄心齋文庫本 伊勢物語図屏風について」大口裕子氏（霞会館）

「一条兼良筆『伊勢物語』について」小山順子氏（国文学研究資料館）

館）

「伊勢物語山口記」の現存伝本とその性格」松本大氏（奈良大学）

・第三回研究会（二〇一六年二月二六～二七日）

《研究発表》

「山崎龍女「業平涅槃図」について」恋田知子氏（国文学研究資料館）

館)

「古活字版『伊勢物語』について」田村隆氏(東京大学)

「松平定信の伊勢物語筆写活動とその周辺」一戸渉氏(慶應義塾大学
学斯道文庫)

「三条西公条の伊勢物語講釈」本廣陽子氏(上智大学)

「解題執筆経過報告―近代絵画における図様の変遷」谷川ゆき氏(国
文学研究資料館)

「鉄心斎文庫の伊勢物語の江戸戯作書について」二又淳氏(明治大
学)

・第四回研究会(二〇一七年五月二〇日)
《講演》

「伊勢物語中世注釈の源氏物語参照」ジョシユア・モストウ氏(ブ
リテイッシュ・コロンビア大学)

・第五回研究会(二〇一七年八月一九日)
《研究発表》

「物語の書写者を考える―伝荒木素白筆『伊勢物語』を端緒として」
海野圭介氏(国文学研究資料館)

「江戸のロングセラー―伊勢物語刊本の諸問題―」神作研一氏(国
文学研究資料館)

・第六回研究会(二〇一八年六月一日)
《研究発表》

「定家本伊勢物語から見えてくるもの―源氏・大和・古今・後撰―」

加藤洋介氏(大阪大学)

「『伊勢物語拾穂抄』について」青木賜鶴子氏(大阪府立大学)

この基幹研究の成果として、二〇一七年(平成二九年)一〇月一日
〜二月一六日の間、国文学研究資料館展示室において特別展示「伊勢
物語のかがやき―鉄心斎文庫の世界―」が開催され、三千人を超える数
多くの人々が来訪、見学した。

この特別展示では、新しい展示手法の試みである「古典AR」(国文研
ニューズ53掲載の北村啓子氏「古典ARの紹介」参照)が用いられ、ま
た、「ゆるキャラマスコットの「業平君」も登場するなど、展示にさま
ざまな工夫がこらされて、充実した展示品の魅力を親しみ深く来館者に
伝えるうえで、大きな効果をあげていた。

この特別展示にあたっては、キャプションや解説などを基幹研究メン
バーが分担して執筆した。前記の第一回〜第六回の研究会における発表
の多くは、この特別展示にも関わって、その準備として行われたもので
あった。それらの内容は、図録『伊勢物語のかがやき―鉄心斎文庫の世
界―』(山本登朗・小林健二氏・小山順子氏・恋田知子氏編、二〇一七年
一〇月五日発行)にもまとめられている。

この基幹研究そのものは、特別展示終了後も二〇一八年度末まで継続
中であり、同年六月には第六回研究会も開かれているが、それらさまざ
まな成果をふまえて、二〇一八年五月の地域資料専門員会議(旧「調査

員会議」において、冒頭でも述べたように、次のようなシンポジウムが行われたのである。

《シンポジウム「魅惑の鉄心齋文庫―伊勢物語の〈文化史〉―》

〈趣旨説明〉 司会進行 山本登朗

〈報告〉

『伊勢物語愚見抄』所引の『伊勢物語』の本文について―一条兼良本

『伊勢物語』の性質―小山順子氏

「近世伊勢物語写本へのアプローチ―葛岡宣慶本をめぐって―」藤島

綾氏

「鉄心齋文庫本『伊勢物語図屏風』について」大口裕子氏

「松平定信の「写病」―伊勢物語筆写活動とその周辺―」一戸渉氏

〈討議〉

鉄心齋文庫の伊勢物語コレクションは、質量ともに空前のものではあるが、たとえば天理図書館に所蔵されているような、研究者にすでによく知られている古写本ばかりが集められているわけでは必ずしもない。芦澤新二・美佐子ご夫妻は伊勢物語に深い愛情を持ち、収集された写本や版本の一点一点を我が子のように慈しんで大切にされたが、それらの収集はあくまでも限られた財力の中でなされており、またお二人は決して専門の研究者ではなかった。そこに、鉄心齋文庫の伊勢物語コレクションの特徴があり、それこそが、このコレクションのかけがえのない

魅力にもなっていることを忘れてはならない。鉄心齋文庫の伊勢物語コレクションは、我々がこれから発掘を試みることによって多くの新たな鉱脈を見つけることができる、そんな可能性を秘めた未開の沃野なのであって、だからこそ「魅惑の鉄心齋文庫」なのである。

鉄心齋文庫の資料からとりわけ豊かに浮かび上がってくるのは、伊勢物語の享受の歴史であり、それが形作ってきた「文化史」である。今回のシンポジウムは、そこに焦点を当てて、さまざまな伊勢物語享受のありさま、伊勢物語の「文化史」の姿を追求、発掘する試みであった。その内容は、注釈書、絵入り本、屏風から書写活動まで、多岐にわたっており、伊勢物語享受の豊かさと同様さを示すものとなっている。

四人のパネリストが鉄心齋文庫の沃野をどのように掘り下げ、その結果どのような鉱脈が姿を現しているか。以下、当日の報告をもとにまとめられたそれぞれの論考によって確認していただきたい。

なお、この基幹研究の成果の一部として、ブックレットへ書物をひろく15『伊勢物語 流転と変転―鉄心齋文庫本が語るもの―』（山本登朗、平凡社）が二〇一八年八月に刊行されている。